

釣り

釣り道楽と弥勒菩薩みろくぼさつ

気が付いてみたら「釣り」という趣味に嵌はまって、四十年以上も経っていた。私にとっての釣りは、趣味の領域を超えて「道楽」といっても良いほど人生に寄り添い生活を彩ってくれた。たかが釣りだが、釣りは技術的に難しいばかりではなく、思索を掘り下げ純化してくれる。

懐かしい唱歌「ふるさと」にもあるように、男の子なら小鮒を釣った思い出を持つ人も多いと思う。細い糸一本で、水中の未知の世界と交信し、魚になった気分で水中を天衣無縫の遊泳が出来るのだから母の心配もどこへやら、戦果のバケツを手在意気揚々と帰宅したものである。腕白盛りの少年にとって釣りは「トム・ソーヤの冒険」を凌ぐほどに愉快そのものだったのである。それが、いつしか釣りは遠くなって行く。

釣りで連想されるのは、古代中国の「呂尚」の逸話であるが、南画などで寒江の雪の中で、釣り人が小舟を浮かべている景には、そぞろ詩心が掻き立てられると思うのは私だけではないと思う。

さて、釣りとは魚を釣ることを目的とするが、釣果を目当てに釣り書に従って臨んでも、心満たされることは少ないものである。ど

れもが他人に釣れない魚を、いかに多く釣るかを説いているからである。

当然のことながら魚にも命がある。人間との対比で考えるのは愚かしいことかも知れないが、地球上の生命は四十億年前に一つの細胞として海の中で偶然誕生したと云われている。その後、0の数がある。その後方に幾つ付ければよいのか解らないほどの年月を経て「魚」と「人」の種に分かれて生きてきた。ところが、「人」という種は増え、ホモ・サピエンスと称して地球はおろか、宇宙の帝王として君臨し、科学で総てを支配できると錯覚するようになった。

先年亡くなられた物理学者戸塚洋二博士は、ニュートリノに質量のあることを実証し、「やがて地球は重力を増し膨張して五十六億年後、太陽に呑み込まれて消滅する」という理論を発表した。この理論は世界中の科学者を驚愕させると同時に高い評価を受けた。

ところで、五十六億年という数字は、どこかで耳にしたことがある数字である。確か、何時も眠っているように見える、あの弥勒菩薩の存在である。仏教界の予言に「この大地の総てのものは、五十六億七千万年後に滅びる時が来る。その時、弥勒菩薩が信仰篤き者あつを救い出す」とあったように記憶する。

勿論、現代科学は我々が抱えている謎をすべて解き明かしている訳ではない。しかし、この文字通りの天文学的数字の一致はどう理解すればいいのであろうか。この数字を「偶然」などと言ったなら、戸塚博士には失礼千万、天尊に対しては不遜になってしまうであろう。

極最近、「神の粒子」(ピーター・ヒッグス粒子)の存在が確認され、世界中をトップニュースで駆け巡った。「神の粒子」とは既にご存知の人も多いと思うが、四十億年以上前、宇宙はビッグバンという大爆発を起こし、十七の素粒子に別れたと云われている。人類は十六の素粒子は確認できたが、十七番目の素粒子はどうしても確認できずに今日まで来た。ところが、何と五十年前にイギリスのピーター・ヒッグスという人が十七番目に微細な素粒子のあることをいろいろなデータから予言していたのである。従って、これをピーター・ヒッグス粒子とも云う。この粒子には微量な重力があり、永い時間をかけて、生物の生命の誕生、その進化、危機への適応力、そして、現在知る限り人間が宇宙に君臨する覇者?となっているのである。

世の中には知らないことが多い。文型の人「信仰」という絶対

無二という介在によって解決できるかも知れないが、科学のそれは手にとって目で確認出来ないだけに、理論をいくら聴いても凡人には放射能を含んだ風と清風を区別する以上に難しい。

私が最も恐れるのは、魚たちが将来大進化を起こし、人間に齒向かう将来が来るのではないかという恐れである。現在はアミを含め鰯や秋刀魚は食物連鎖の最下部に位置しているが、彼らの一尾一尾も「神の粒子」の子孫なのである。彼らが突然変異を起こし、数にものを云わせ遠い将来集団で陸に上って来たとしたら、人間は同胞に気づかって兵器の一切を使用できない。世界はたちまち彼らの独壇場となるだろう。SF的な話になってきたが、「魚たち」が新参者の人間に逆襲する進化もあり得るのではないかということである。

その時、弥勒菩薩はどのような方法で我々を救ってくれるのだろうか。また、生前の善行や信仰心をどのようにして識別するのだろうか。気の遠くなるような未来の話ではあるが、未来は過去によって相対的に支えられる概念でもある。

畏れの中に希望と期待を持ち、ゆらゆらと揺れる心は、哲学や物理学を考えつつも未だに釣竿を放さない愚人が一人いる。ここまで来ると病は早や膏肓である。